

# 王希奇「一九四六」高知展を終えて

王希奇「一九四六」高知展実行委員会 崎山 ひろみ

「星火方正」の32号「2021年5月刊」でご紹介いただきました王希奇「一九四六」高知展（2021年11月28日～12月5日）は、地方都市高知では驚異的な2782人という入場者を迎えて無事終えることができました。

コロナ禍で開催が危ぶまれていましたが、秋に入って全国的に収まり始め、高知では11月半ばからゼロの日がずっと続いていましたので、県外からも多くの方をお迎えすることができました。

しかし、何といたっても「一九四六」高知展の成功は王希奇先生の絵の力が一番です。

11月27日の搬入の日、初めて縦3m横20mの巨大な絵を目にしました。会場の真ん中で全体を見ま



したが、あまりの迫力に衝撃を受け、立ち尽くしました。

28日にやっとホテルの光のような明かりに浮かび上がった赤ちゃんを負い小さな子の手を引いている母親、DDTの粉を振りかけられている少年、大きな荷物を背負った家族などを見て、どれも私の体験と重なって胸が苦しくなり目が潤ってきました。

## 宝田 明氏を囲んで、左端：崎山ひろみ

私たちは2019年暮れから準備会、そして2020年2月に実行委員会を立ち上げ、約2年かけて開催に向けて準備してきました。コロナ禍の中、いろいろと困難なこともありましたがみんな（戦争を体験していない世代の実行委員も）我がこととして取り組みました。また、高知大学の教授の呼びかけで学生実行委員会もでき、SNSで満洲の歴史や開拓団について、王先生のことや絵について発信してくれました。実行委員会で入場者の目標を1500人としたことも最初は無謀な目標と思っていましたが、前売り券を一生懸命売り、1000枚を超えたころには「もしかするといけるかも・・・？」と思うようになりました。開催中は60人以上のボランティアスタッフが、受付、清算、物販、コロナ対応係、会場係などとても良い働きをしてくださいました。みんな、「よくぞ声をかけてくれた。この絵画展に関わられて本当に良かった。」と言ってくださいました。王先生の絵が人を動かしたのだと思います。

開催3日目には、「当日券用のチケットが足りなくなる！！」「パンフレットが全然足りない！！」と大慌てで追加印刷を依頼しました。マスコミの後押しもあり、前売りでの入場者は1313人、当日券での入場者はなんと前売りとほぼ同じくらいの1259人もの方が見に来てくれました。王希奇「一九四六」高知展はこうして大成功を取めることができました。

この絵画展を通して、高知県の地域性を大きく感じたことでした。まず高知から満洲に渡った開拓団だけでも人口比全国3位の約1万人を満洲に送っています。その体験者の方、そしてその家族の方が多く来てくれていました。そして、報道を見て「これはぜひ見てみたい！」と思うものには当日券でも見に来てくれること、そして口コミでどんどん広がっていくことなどです。

会場では何度も絵の前を歩き誰もがゆっくり一人一人の姿を確認するかのように見ていました。また、会場のコーナーで流していた王先生の制作中のDVDを見て、絵を描くことになったいきさつや戦争による弱者の過酷な体験、王先生の平和への強い思いを知ってまた絵を見る・・・といった姿が多く見られました。会場の真ん中に置いてある椅子に座って長い時間絵を見ている方もいました。

鑑賞後のアンケートには、「幼子を背中におぶり、虚ろな目をした母親の姿。この悲惨な状況への怒りをどこにぶつけていいのかわからないかのような少年の眼光鋭い目。人々の茫然としたような姿など、その圧倒的な作品を前にするとそれを評する筆力は私にはない。」「王先生にとって、日本人中国人などという区別はない。画家のその思いは、難民、流民と呼ぶしかできない人々への哀惜の心に満ちている。」「戦争を知らない世代の息子が、『すごい絵だったよ。父さんも見たらいいよ。』と勧めていた。」

また、「今まで戦争の絵はずいぶん見たけれど、これほど胸を打つ絵は見たことがありません。」というものもありました。学生以下を無料にしたことで学生もたくさん来てくれました。高校で学校行事として見学に来てくれたり、中国やその他のアジアの国からの留学生も鑑賞に来てくれ、中国語で王先生へのメッセージを書いてくれたりもしました。皆それぞれ王先生の思いをしっかりと受け止めてくれていました。

王先生は言います。「この絵は今も世界中で起きている戦争で犠牲になっている人にも向けているものです」。

戦争の愚かさ、平和の大切さを訴え続ける王先生の絵は多くの感動をもたらしました。

(さきやま・ひろみ：1930年6月旧満洲撫順市生まれ。12月に大連市に転居。1936年当時の首都新京(現長春)に転居。1946年8月日本に引き揚げ。帰国後高知市で女学校を卒業後2つの職を経て日本生命に勤務。1988年退職後満洲引揚者の集いや、体験の聞き取り、「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」などを行っている。)

(さきやま・ひろみ：1930年6月旧満洲撫順市生まれ。12月に大連市に転居。1936年当時の首都新京(現長春)に転居。1946年8月日本に引き揚げ。帰国後高知市で女学校を卒業後2つの職を経て日本生命に勤務。1988年退職後満洲引揚者の集いや、体験の聞き取り、「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」などを行っている)

(方正友好交流の会、会報34号、「星光方正」14～15、2022年5月より転載)